

# 歌ことば「女郎花」考

——その「移動」と「前栽掘り」、そして「歌合」との関係——

飯塚ひろみ

はじめに

歌ことば「女郎花」を詠んだ和歌で最も著名なものとしては、おそらくは『古今集』秋歌上に採録された僧正遍昭の、

名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にか

たるな(古今三二六)<sup>(I)</sup>

が挙げられるであろう。「をみなへし」という歌ことば自体は、古く『万葉集』からその用例が認められるが、女郎花を女性に見立てて戯れたとみられるこの歌が、その後の和歌世界における女郎花像を作り上げていったともいえる。

たとえば『和歌植物表現辞典』(東京堂出版一九九四)を要約すると、

(I) 「をみなへし」が歌語として豊かな表現性を發揮するの

は『古今集』以後。秋上に収められた遍昭の作により、

僧をも堕落させる妖しく美しい「女」というイメージが

新たに付与された。

と、「女郎花」の歌ことばとしての転換期を『古今集』とし、

二二六番歌の影響を積極的に認める。また、

(II) 『古今集』では「野の女」に見立ててよまれる例が多く、

「旅の野で男を魅了する女」という役回りの女性に見立てられ、恋人をなぞらえることはない。

という『古今集』の特徴をおさえ、それは八代集に拡大してもいえることを次のように示唆する。

(III) 八代集のうち恋部に収められたのはわずかに一首で、典

型的な恋歌の素材とはなり得なかった。「をみなへし」で比喩された女性にはどこか男性からの擲揄・侮蔑の気持ちがこめられていたようである。

ここに見える「擲揄・侮蔑」は、誹諧歌や遊戯歌につながる要素もあつたらしく、

(IV) 俗語的な表現と結びつくことが多く『古今集』の誹諧歌に四首。物名歌や折句のような遊戯歌も多い。

とも述べ、その用例をやはり『古今集』に見出している。

そして最後に歌ことばとしての「女郎花」の様相を、

(V) 平安初期には「女」を連想させる身近な歌語として重用されたが、誹諧歌や物名歌が和歌史の中で衰退するにつれてその連想による詠が減少。平安後期以降には、題詠や叙景歌の中で群生する「をみなへし」の花そのものがうたわれるように変じていく。

とまとめる。詳細な調査に基づいた見解であり、的確であると思われる。

一方で『歌枕歌ことば辞典』（増訂版・笠間書院一九九九）は、(VI) 『金葉集』を例外とするほかは、『後拾遺集』の六例中五

例までが、一条朝以前の、いわば三代集時代の人々の詠

であるというように、数字に現れる以上に減少してゆくことを知るのである。

と、歌集別の変遷ではなく「女郎花」の歌そのものが詠まれた時期が一条朝以前に集中しているという鋭い指摘をし、その理由を、

(VII) 何よりも「言葉」に依拠し、また自然は人事をよむための表象であつた三代集時代の和歌のあり方と、宮廷サロンにおける男女の即興的やりとりが中心をなす『後撰集』の世界が、このように「をみなへし」を数多く歌によませることになつたというべきであろう。

と、『古今集』に始まる「言葉」遊びに加えて、『後撰集』の世界を作り出す男女のやりとりに「女郎花」の増加の要因を見る。これは言い換えれば、「男女の即興的やりとり」の具材のひとつとして「女郎花」も存在していたということになるだろう。そうでありながら『和歌植物表現辞典』（III）のいうように「典型的な恋歌の素材とはなり得なかった」この歌材は、それは「宮廷サロンにおける男女」からどのように扱われていたのであろうか。

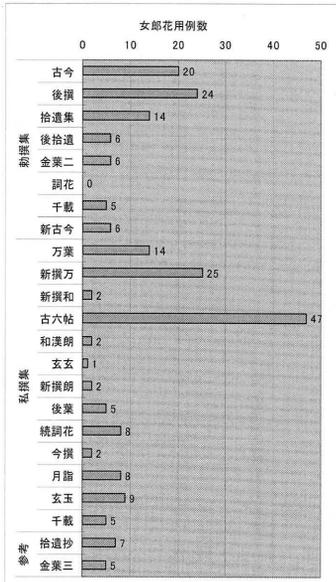
このことを考えるひとつの手がかりとして、今回は「女郎花」の存在する場所の変化に注目した。先に述べておくならば、

『古今集』と『後撰集』の間には、貴族の生活圏外の「野」から貴族の邸の「前栽」へという「女郎花」の「移動」が見られるのである。このような女郎花の「移動」という観点から、三代集における「女郎花」の用法を整理しつつ、歌ことば「女郎花」について考えてみることにする。

### 一、「女郎花」の用例数と「場所」の変遷

まずは女郎花の具体的な用例数を視覚データで確認しておく。う。

〔表1〕「女郎花」歌集別用例数（対象は『万葉集』並びに八代集及び同時代の私撰集。  
用例数は『新編国歌大観』（CD-ROM, ver. 2）による）



歌ことば「女郎花」考

女郎花が古くから歌に詠まれたことは『万葉集』に十四の用例があることから確認されるが、『万葉集』の総歌数から考えれば多いとはいえない用例数である。<sup>③</sup>したがって女郎花の用例が集中するのは三代集となる。三代集の隙間を縫うような形で『新撰万葉集』に二十五例、『古今和歌六帖』に四十七例と、私撰集においてもかなりの用例を持つことがわかる。

『古今集』で二十例と用例が増えた要因としては、宇多院による数度の「女郎花合」の開催が考えられる。『古今集』の用例のうち「朱雀院のをみなへしあはせ」に詠まれたという詞書を持つものが八例認められるのである。『後撰集』では「女郎花合」の歌とみられるものは三例と減少しており、代わって権力者の日常生活の中での詠みが増えていく。まさに「歌枕歌ことば辞典」がいうところの「宮廷サロンにおける男女の即興的やりとりが中心をなす」世界である。しかし『拾遺集』で早くも減少傾向が見られ、『後拾遺集』以降はさらに減少し数例程度に落ち着くことがわかる。

次に女郎花のある場所の変遷を見てみよう。〔表2〕は三代集の女郎花歌を歌の内容や詞書を手がかりにして分類したものである。「野」「前栽」のほかに、例えば

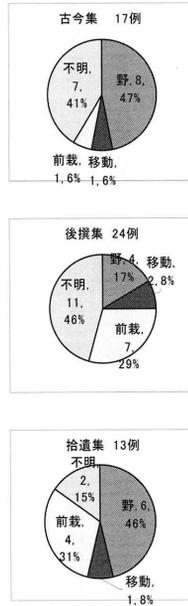
(朱雀院のをみなへしあはせにのみてたてまつりける)

忠岑

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見  
ましを(古今・二二六)

のような移動願望、あるいは移動予定がうかがえるものを「移動」とした。

〔表2〕「女郎花」場所の変遷



『古今集』に三例、『拾遺集』に一例ある折句歌は除外した  
おそらくは『万葉集』からの流れであろうが、『古今集』で  
は約半数が「野」にある女郎花を詠んだものであった。そして  
『後撰集』では権力者の歌の増加に比例して、「前栽」にあると  
みられる女郎花の比率が大きくなっている。これにより女郎花  
が指し示す対象が女性の総体から個体へと変化したと考えられ  
る。『拾遺集』では再び「野」の女郎花の比率が高まるが、「前

栽」の例もそのまま定着し、「不明」が大きく減少している。  
『拾遺集』に至って、女郎花歌の用法が「野」と「前栽」に大  
きく二分化され、その中でそれぞれが確立されたと読み取るこ  
とができるであろう。実際の移動の様子を、用例を取り上げな  
がら次節以降で確認する。

## 二、『古今集』の用例

『古今集』の二十例の女郎花を部立別に分類すると、「秋歌  
上」が十三例、「物名」が三例、「雑体」が四例であり、圧倒的  
に秋の歌が多い。また、『万葉集』には「相聞」歌が三例あっ  
たことを考えると、『古今集』に「恋歌」に分類されるものが  
ないことが意外でもある。

「秋歌上」の女郎花歌は、「萩」の歌九首のあと「露」を一  
首挟んで十三首一挙に並ぶ。女郎花のあとには「藤袴」三首、  
「薄」二首、「撫子」一首と「秋の七草」が続いて配置される。<sup>5)</sup>  
この「萩」をしのぐ女郎花歌の用例数は「秋歌下」の「菊」の  
十一首をも上回る。「秋歌上」の女郎花歌の最初に配置された  
歌はすなわち『古今集』の女郎花歌の最初の歌ともなるが、冒  
頭に挙げた二二六番歌がそれである。再掲しておこう。

題知らず

僧正遍昭

名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にか  
たるな (二二六)

この歌は『古今集』の仮名序に「僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まこと少なし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし」の例歌として挙げられている。そこから考えると、ここに生身の女性の存在はなく「をみなへし」の語の中に「女」を見つけ、「いたづらに心を動か」して詠んだ誹諧歌とも解せる。

続く二例目は、

僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時に男山にて女郎

花を見てよめる

布留今道

をみなへしうしと見つつぞゆきすぐるをとこ山にしたり

と思へば (二二七)

と、「男」という名のつく山にわざわざ立っている女郎花をい  
やなものだと詠む歌である。「うし」の理由について片桐洋一  
氏は、「男がたくさん居そうな山に立っているから自分など問  
題にされないと苦しがつている」(笠間書院『古今和歌集』と  
する。しかし『古今集』の配列の中で解釈するならば、「詞書

から見て二二六の僧正遍昭の歌を意識して作られ、意識して並べられたもの」(同)という氏自らの指摘をもっと生かして、「(高僧である)遍昭をも墮落させてしまったいやな花(II女)」と捉えるべきではないだろうか。だからこそ詠者は女郎花に近づかないようにして「見つつぞゆきすぐる」のである。

このように『古今集』では、冒頭にいわゆる遊女的な女性のイメージを引き出すような女郎花の配置がなされている。それは『和歌植物表現辞典』(II)のいう「野の女」としてあり、女郎花のある「場所」という観点から見れば、

是貞親王家歌合の歌

敏行朝臣

秋ののやどりはすべしをみなへし名をむつまじみたびな  
らなく (二二八)

題しらず

小野美材

をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名を  
やたちなむ (二二九)

朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける

左大臣(時平)

をみなへし秋の風にうちなびき心ひとつをたれによすら  
む (二三〇)

寛平の御時、蔵人所の男ども、嵯峨野に花見むとま  
かりたりける時、帰るとて皆歌よみけるついでによめ  
る  
平貞文

花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべにねな  
ましものを(二三八)

のような「野」の女郎花を詠んだ例が続く。

また、女郎花に関わる地名は、『万葉集』では「佐紀」であつ  
たものが「男山」(二二七番歌)や「嵯峨野」(二三八番歌詞書)  
に変化している。これには平城京から(長岡京を経て)平安京  
への遷都による要因もあるだろうが、「男」あるいは「サガ」  
(性)という、より「女」と結びつく地名があえて選択されて  
いるとも考えられる。どこの野にもある女郎花が、それぞれの  
詠歌事情により特定の地名と結びつくということであろう。

### 三、『後撰集』の用例

『後撰集』の女郎花歌は二十四首である。部立は「秋中」が  
二十、「秋下」が一、「雑」一「哀傷」一「恋」がそれぞれ一首であり、  
『古今集』と同様に圧倒的に秋部の歌が多く、

延喜御時、秋歌召しければ奉りける

貫之

をみなへしにほへる秋のむさしのは常よりも猶むつまじき  
かな(三三七・秋中)  
(題しらず)  
つらゆき

白妙の衣かたしき女郎花さけるのべにぞこよひねにける  
(三四一・秋中)

秋の野によるもやねなんをみなへし花の名をのみ思ひかけ  
(題しらず)  
よみ人しらず

つつ(三四五・秋中)

のように、『古今集』時代の歌が引き続き入集している(三四  
五番歌は「よみ人しらず」であるが、『躬恒集』にも見られる)。  
しかし一方では、右大臣(≡藤原師輔)・左大臣(≡藤原実  
頼)・三条右大臣(≡藤原定方)・枇杷左大臣(≡藤原仲平)・  
太政大臣(≡藤原忠平)といった、時の権力者の歌の入集も目  
立つ。これら権力者の歌は、女郎花のある「野」に出かけてゆ  
くのではなく、彼らの生活圏内に存在している女郎花を詠むと  
いう傾向にある。

大輔が後涼殿に侍りけるにふぢつばよりをみなへしを  
をりてつかはしける  
右大臣(藤原師輔)

折りて見る袖さへぬるるをみなへしつゆけき物と今やしる

らん(二八一・秋中)

すまひのかへりあるじのくれつかた、をみなへしををりてあつよしのみこのかざしにさすとて

三条右大臣(藤原定方)

をみなへし花のなならぬ物ならば何かは君がかざしにもせん(三四八・秋中)

法皇、伊勢が家のをみなへしをめしければたてまつる

をききて

枇杷左大臣(藤原仲平)

女郎花折りけん袖のふしごとにすぎにし君を思ひいでやせし(三四九・秋中)

などがその例である。また、

七月許に、左大臣の母身まかりける時に、おもひに侍ける間、后の宮より萩の花を折りて給へりければ

太政大臣(藤原忠平)

をみなへしかれにしへのべにすむ人はまづさく花をまたでも見ず(二四〇一・哀傷)

は「女郎花が枯れてしまつた野辺」と詠んではいるが、そこに住むのは太政大臣忠平であるから、自らの邸を「のべ」にたとえたものであり、ここに詠まれた女郎花は忠平邸にあったもの

であると見なされる。后の宮のいる「宮中」から「萩」が贈られたことに対して、「女郎花」「野辺」と謙遜して詠んだものであろう。

また、一四〇一番歌は、女郎花を総体としての「女」ではなく、特定の女性(忠平の妻)にたとえて詠んだものである。このような詠み方は他にも、『古今集』にはなかつた「恋」の部に属する女郎花歌、

あひ知りて侍る女の、人にあだ名立ち侍けるにつかはしける  
平まれよの朝臣

枝もなく人にをらるる女郎花ねをだにのこせうゑしわがため(八四四・恋四)

でも確認され、『後撰集』では「女郎花」が「野に群生する花」から「邸に植える花」へと変化し、それに伴い、音の重なり「ヨミナヘシ」と「女(ヨミナ)」から発生した「総体としての女性」を示す以外に、「個体としての女性」(妻・恋人など)をたとえる用法も持つようになっていくことがわかる。

加えて、『古今集』には二例しか見られなかつた「をる」(折る)という関連語が『後撰集』では五例に増え、女郎花を「折る」ことが女性を手に入れることと結び付いてゆく。この顕著

な例が、三四九番歌への返し、

をみなへしをりををらずもいにしへをさらにかくべき物ならなくに(三五〇・伊勢)

であり、女性の側からも「折られる」ことが男性と関係を持つことだと理解されていることがわかる。ちなみにこの贈答歌の事情を説明すると、三四九番の詞書の「法皇」は宇多天皇であり、仲平に歌を贈られた伊勢は、仲平と恋人関係にあった後に宇多院に愛されたことのある女性である。かつて寵をうけた宇多院に女郎花を奉った伊勢に対して、やはりかつての恋人であった仲平が「女郎花を折って昔の恋人(宇多院)を思い出したか」と皮肉まじりに贈った歌といえるだろう。それに対して伊勢は「折っても折らなくても」つまり「関係があってもなくても」それはもう昔のことだと切り返しているのである。

このような、『古今集』には見られなかった「贈答歌」が『後撰集』には採録される。二八一番歌も師輔から大輔へ贈られたものであり、大輔からの返歌も載せられている。『古今集』では男性により一方的に「女」に重ねられていた女郎花が、恋人関係にある男女間の贈答の中で女性にも認知されたことを示す実例ではあるが、大輔・伊勢ともに八四四番歌の詞書のよう

な「あだ名」の立ちやすい女性であったことには注意しておく必要があるだろう。

#### 四、『拾遺集』の用例

『拾遺集』の女郎花歌は十四首となり、『古今集』『後撰集』に比べて減少する。部立別では「秋」が九、「雑秋」が四、「別」が一首であり、これまでと同様に秋の歌として扱われる女郎花歌のあり方が見てとれる。女郎花の用法は、『後撰集』に見られた「対象の変化」(総体から個体へ)と同時に、

題しらず

よみ人しらず

女郎花おほかるのべに花すすきいづれをさしてまねくなるらん(秋・一五六)

嵯峨に前栽掘りにまかりて

藤原長能

日ぐらしに見れどもあかぬをみなへしのべにやこよひたびねしなまし(秋・一六一)

のような「野の女」の見立てや、

題しらず

小野宮太政大臣

くちなしの色をぞたのむ女郎花はなにめでつと人にかたるな(秋・一五八)

題しらず

よみ人しらず

白露のおくつまにする女郎花あなわづらはし人なてふれそ

(秋・二六〇)

房の前裁見に女どもまうで来たりければ

遍昭

ここにしも何にはほふらんをみなへし人の物いひさがにくき

よに(雑秋・一〇九八)

などの誹諧歌の復活という古今時代への回帰現象も確認される。

これに関連してかどうか、女性による女郎花の認識がどのようであったかが推量できる例として次の歌が挙げられる。

題しらず

よみ人知らず

手もたゆくうゑしもしるく女郎花色ゆゑ君がやどりぬるか

な(一五七)

新大系脚注では、「手もだるくなるほど苦勞して移し植えた

かいがあって、女郎花の色の美しさに魅せられて、あなたが泊

まってくれたことだ」と訳し、これを女性詠として扱っている。

つまり、女性が恋人を呼び寄せる手段として女郎花を利用して

いるということである。女郎花という花の美しさを讃えるより

も、理屈ぬきに女郎花の色香にすり寄ってゆく男の性を痛烈に

皮肉った歌とも捉えられるだろう。『拾遺集』の時代には、遊

女性を伴う女郎花のイメージが女性にも浸透していたということであろうか。

## 五、「野」から「前裁」へ ― 「前裁掘り」の実例

それでは、『後撰集』で増加した「前裁」の女郎花はどのように持ち込まれ、そして根付いたのであろうか。いくつかの例から考えてみたい。

八月なかの十日ばかりに雨のそほふりける日、女郎花ほりに藤原のもろただを野辺に出だして、遅く帰りければつかはしける

左大臣(藤原実頼)

くればはて月も待つべし女郎花雨やめてとは思はざらなん

(後撰一九四)

嵯峨に前裁掘りにまかりて

藤原長能

日ぐらしに見れどもあかぬをみなへしのべにやこよひたび

ねしなまし(拾遺一六一)

詞書に「女郎花ほり」「前裁掘り」ということばが見える。

当然ながら、邸の庭に植えるために掘りに行くのであろう。し

かしこれは、ただ自邸に植える花を野に取りに行くといったよ

うな気軽な行動であろうか。『後撰集』二九四番歌の詞書には、

「雨のそほふりける日」にわざわざ「女郎花ほり」に出かけた  
と記されているのである。思いつきで前栽に植える花を取りに  
行ったというよりは、この日に行かなければならなかった事情  
がありそうである。

そこで、このような「女郎花ほり」「前栽掘り」というもの  
がどのように行われたのかを探るため、史実にその事例を求め  
てみた。史実においては平安朝に六例、「前栽掘り」にあたる  
記事が確認された。うち二例は長和元年九月六日『小右記』並  
びに『御堂関白記』、三例は翌長和二年八月十三日（及び十四  
日）の同じく『小右記』『御堂関白記』、残る一例は万寿四年八  
月四日の『小右記』の記事に見られる。万寿四年は詳細が不明  
であるが、長和元年・長和二年についてはいずれも皇太后宮彰  
子に献ずるために行われたものである。三代集から時代は降る  
ことになるが、特に詳細に記録されている長和二（一〇一三）  
年の記事から事情を確認してみよう。

『小右記』長和二年八月十三日の記事に、「今日左衛門督教  
通相催人々向嵯峨野掘前栽可齋参皇太后宮云々、資平隨身緝袋  
破子会彼所云々」とあり、翌十四日の記事にはその様子が詳し  
く記されている。

資平云、昨日左衛門督教通・左宰相中将経房・大藏卿正光・  
三位中将頼宗及頭中将公信・雲上人々各隨身様々破子向嵯  
峨野、人々具長秘、但右馬頭兼綱・左中将能信・春宮権亮  
道雅長秘施風流、或作通垣植花、又作草整形、納菓子立花  
中、能信所為、於野中食、更到右近馬場詠和歌、参皇太后  
宮、左相府、大納言齊信、中納言俊賢・行成候宮、有酒食  
者、

この様子は『御堂関白記』同十三日条にも同様に記される。

参皇太后宮、入夜殿上人堀前栽持参、両三上達部相具長櫃、  
両三有風流、其中有居檜破子長櫃、侍二人取之持上間、打  
落為散々、人々指々高声相咲、上達部八九許参会、巡行數  
度、持来破子等取散退出、前栽等裁御前了、依月光腫々立  
篝火、入夜月明令取退、

この「前栽掘り」は、おそらくは道長の命によるものであろ  
うが、殿上人が大勢で破子や長櫃を携えて嵯峨野に向向いたと  
いう大掛かりなものである。『小右記』によれば、掘った草花  
を風流にしつらえて、殿上人らがまず宴（秋の花見？）を催し、  
右近馬場で和歌を詠み、皇太后宮に参ったとある。その後のこ  
とを記すのが『御堂関白記』であり、皇太后宮の御前にも上達

部が集い、掘ってきた前栽を植えて、篝火あるいは月明かりのもとのその風流を楽しんだ様子が書き留められている。

## 六、「前栽掘り」と歌合

道長の場合が、宴のための「前栽掘り」であったのかそれとも「前栽掘り」のついでにの宴であったのかは明言できないが、この事例を参考にして三代集に論を戻せば、

朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける

左大臣

をみなへし秋のの風にうちなびき心ひとつをたれによすら

む（古今二二〇）

に見える「朱雀院のをみなへしあはせ」がそのような「前栽掘り」を伴うイベントの一環として開催されたとは考えられないだろうか。この「朱雀院のをみなへしあはせ」で詠まれたとされる女郎花歌は『古今集』に全八例（二三〇から二三六及び二三九）あり、『後撰集』の

おなじ御時（＝寛平）のをみなへしあはせに

藤原おきかせ

をるからにわがなはたちぬ女郎花いざおなじくははなばな

歌ことは「女郎花」考

に見む（二七四）

もこれに加えられる。

『古今集』以前に「女郎花合」なるものは、『平安朝歌合大成』（増補新訂版・同朋舎出版一九九五）によれば、昌泰元年（八九八）年秋の①「亭子院女郎花合」、某年秋の②「宇多院女郎花合」、同じく某年秋の③「朱雀院女郎花合」の三度があり、すべて宇多院による開催とされる。『古今集』に見える「朱雀院のをみなへしあはせ」は、必ずしも③のみを指すのではなく、①と重複する歌が三例、③との重複が三例、この六例のうち一例は①と③の両方に見られるという内訳になっている。

この「女郎花合」がどのような性格のものであったのかを、『平安朝歌合大成』において最も資料の充実する①から確認してみよう。まず、「亭子の帝おりのさせ給ひて又の年、女郎花合せさせ給ひけるを左右の頭をばおきて、帝と后なむせさせ給ひける」とあるから、退位後の半プライベートな余興として催されたと考えられる。帝と后が左右に分かれており、左方には二番合わせの左大臣（時平）を筆頭に、七番左に忠岑・八番左に躬恒・九番左に興風と続き、最後の十一番に左「御製」・右「後の宮」とあることから、男女に分かれて競われたものであ

るかもしれない。<sup>(13)</sup>

十一番のあとには「花は右劣り、歌は右勝ちにけり」と勝敗が記され、歌だけでなく花も同時に合わせられたことがわかる。そしてこの花は、十一番右歌「君により野辺をはなれし女郎花おなじ心に秋をとどめよ」により、この歌合のために野から移されたものであると推察される。

このような草木に事寄せた歌合の形式は、この後にも「前裁合」として数度催されており、その際にも前裁をわざわざ植えたとかがうかがえる記載が数例みられるので挙げておこう。

・延長五(九二七)年秋小一条左大臣忠平前裁合

太政大臣東院つくりいでたるときに、御子どもの君達左右と方わきて、寝殿の西東によるづのをかしき前裁をうゑわたして、そのうゑたるものどもの名に歌をよみてあはせられける、

・天祿三(九七二)年八月廿八日規子内親王前裁歌合(乙本)

齋宮に男女房分きて、御前の庭の面に、薄・荻・蘭・紫苑・芸(くさのかう)・女郎花・刈萱・瞿麥・萩などを植ゑさせ給ひ、松虫・鈴虫を放たせ給ふ。人々にやがてそのものにつけて、歌を奉らせ給ふに、

・貞元二(九七七)年八月十六日三条左大臣頼忠前裁歌合

貞元二年八月十六日、左大臣殿の遣水虫の宴せらるる作法。寝殿と東の対との中なる細殿の前に、遣水せられたり。整(いしだたみ)をうるはしく舖きて、遣水の左右に前裁植ゑられたり。(中略)上には詩を誦せられ、下には古歌をぞ誦しける。月の光に、みなおのおの書き読みそそく。暁方になりて、火あからかに点して、おのおのみな文ども奉る。

「三条左大臣頼忠前裁歌合」で詠まれた女郎花歌が『拾遺集』には採られている。

三条太政大臣家にて歌人召し集めてあまたの題詠ませ侍けるに、岸のほとりの花といふ事を 源重之

ゆく水の岸にははる女郎花しのびに浪や思ひかくらん (拾遺一〇九七)

詞書が「あまたの題詠ませ侍りける」と述べるのとおり、この歌合では一〇二首もの歌が詠まれた。遣水をまず整えてからその左右に前裁を植えるという作庭を伴う大掛かりなものであり、もしかすると「東院つくりいでたるとき」の「延長五(九二七)年秋小一条左大臣忠平前裁合」と同様に新邸披露の宴であった

のかもしれない。月の光や篝火のもとで和歌や詩が作られたというこのような歌合の有様を、後世道長が「前栽掘り」に続く宴の際に取り入れたのかもしれないことは、前節に引用した『御堂関白記』長和二年八月十三日条の「依月光腫々立篝火」「入夜月明令取退」から類推されるところである。

## 結び

以上、前半では女郎花の「移動」に注目して三代集の用例を再確認した。『古今集』では「旅の野で男を魅了する女」（『和歌植物表現辞典』（Ⅱ））として「野」にあった女郎花は、『後撰集』では貴族の邸の「前栽」へとステージを移した。いわば「非日常」の象徴としてあった女郎花が、「宮廷サロンにおける男女」（『歌枕歌ことば辞典』（Ⅶ））の「日常」に持ち込まれたのである。それに伴い、喩えとしての女郎花は「女性の総体」から「個体の女性」を示すようにもなった。

また、後半では詞書に見える「前栽掘り」ということばを頼りに平安貴族と女郎花との関わりを考察した。「前栽掘り」は宴と関連するイベントとしてあり、ひいては歌合ともかかわる可能性がある。この「前栽掘り」を経て「前栽」に植えられた

ことにより、女郎花が京の貴族の間で身近な歌材として取り上げられるようになったと考えられる。

しかしながら、身近になったといっても、歌ことば「女郎花」をめぐっては男女間に温度差があるようだ。それは圧倒的に女性詠による「女郎花」の歌が少ないことからもいえる。考えてみれば、「野」から「前栽」へ女郎花を移す「前栽掘り」の一連の行動は男性に帰属するものである。女郎花の咲く「野」に遊ぶ行為も、宴を開いて「前栽」に女郎花を移し植える行為も、ともに男性の遊興という位相にあるといえる。それはあたかも巷に大勢いる女性たちの中から好みの女性を連れ帰り、自己の領域に囲い込む享樂のようである。歌ことば「女郎花」は、このような男性心理の密やかな楽しみと親密な関係にあり、男性の間でいわば隠語のような機能を持っているとはいえないだろう。

## 注

(1) 引用する和歌の本文・歌番号は『新編国歌大観』による。以下同じ。ただし『万葉集』に限っては、万葉仮名の訓みについて諸本を参考に改めた箇所がある。

(2) ただし古今三二六番歌が詠まれたときに遍昭がすでに出家していたかどうかは不詳。

(3) 参考までに、「秋」は一四四例、「尾花」(「薄」) 五三例、「撫子」(常夏色) 二九例。これらは「古今集」ではそれぞれ十六例・十一例・二例と減少する。

(4) 「折りて見る袖さへぬるをみなへしつゆけき物と今やしららん」(秋中・右大臣「師輔」)、「をみなへし花のなならぬ物ならば何かは君がかざしにもせん」(秋中・三条右大臣「定方」)、「女郎花折りけん袖のふしごとすぎにし君を思ひいでやせし」(秋中・枇杷左大臣「仲平」)、「をみなへしかれにしの上へにすむ人はまつさく花をまたでとも見ず」(哀傷・太政大臣「忠平」) (七草の残りの「葛」は「秋歌上」には見えず「秋歌下」に一例、「朝顔」は「秋歌上」「秋歌下」ともに用例がない。

(6) 新大系脚注では、二二六番歌「おつ」(おちにき) について「女戒色を破ること」とし、二二七番歌には「遍昭は類なき道心の人なり。その所へ行く道にて、女郎花の、男山といふ山に咲きたるを見てこの心出来たるなり」と『教端抄』からの引用を添える。

(7) 娘子部四 咲沢二生流 花勝見 都毛不知 恋愛措可聞 (巻四・相聞・六七八)  
 姫押 生沢刃之 真田葛原 何時鴨絡而 我衣将服 (巻七・譬喻・一三五〇)

娘部思 咲野尔生 白管自 不知事以 所言之吾背 (巻十・春相聞・一九〇九)

(8) 源弼(嵯峨天皇孫) 娘。醍醐天皇皇后藤原穩子に仕える。藤原実頼・師輔・朝忠・橘敏仲などに愛された。

(9) 「よろづよにかからんつゆをみなへしなに思ふとかまだきぬらん」(「八二・大輔」)、「をみなへしをりををらずもいにしへをさらにかくべき物ならなく」(「三五〇・伊勢」)

(10) 『小右記』本文の引用は、東京大学史料編纂所編纂・大日本古記録『小右記』による。漢字表記については、大日本古記録の注記を反映させた箇所がある。

(11) 『御堂関白記』本文の引用は、東京大学史料編纂所編纂・大日本古記録『御堂関白記』による。漢字表記については、大日本古記録の注記を反映させた箇所がある。

(12) 歌合本文は原則として『平安朝歌合大成』のうち甲本(十巻本)を底本とした資料から引用することとする。甲本以外からの引用の場合はカッコ書きで明示する。

(13) 「亭子院女郎花合」には「これはあはせぬ歌ども」としてさらに二十九首の歌が収録され、これら余興の歌の中には「をみなへしといふ言を句の上下にてよめる」や「これは上のかぎりに据えたる」という、「古今集」の物名歌のような「ことはあそび」の歌も多く見られる。このような盛況により二度三度と「女郎花合」が開催され、ひいては『古今集』に女郎花

歌が多数入集する契機となったとも考えられる。尚、『古今集』で「物名」に分類される女郎花歌は次の三首。「白露を玉にぬくやとささがにの花にも葉にもいとをみなへし」(四三七・友則)、「あさ露をわけそほちつ花見むと今ぞの山をみなへしりぬる」(四三八・友則)、「小倉山みね立ちならし鳴く鹿の経にけむ秋をしる人ぞなき」(四三九・貫之)

(14) 宮中の女房などが参加した歌合などは例外として、女性の詠みであるのが明確なものは、勅撰・私撰集では『万葉集』に一例(中臣女郎)、『後撰集』に二例(大輔及び伊勢)のみ。しかも『後撰集』はいずれも男性からの贈歌への返しであるから能動的な女郎花詠ではない。

